

**研究主題**

「メンターの活用による若手育成」  
教員の授業力向上から学校力向上へ

大阪市立鷺洲小学校

**1. 取組内容**

本校では、若手の育成を「言葉が子どもを育てる～伝え合い、認め合い、学び合える子どもをめざして～」(授業研究)に視点を置いて取り組んだ。その理由として ① 指導者・支援者の指導の重点がしぼられる ② 児童に付けたい力を明確化し、全教員で取り組める ③ 若手が自らの授業展開について明確な柱を持って取り組める また、研究の活性化へとつながると考えたからである。

**【若手育成に取り組むことが研究の活性化につながる】**

**(1) 研究授業の充実**

研究の視点をもとに子どもの実態や発達段階、育てたい力等を考えながら取り組み、各学年や特別支援学級で研究授業を実施した。さらに、5年次、10年次教員による研究授業や人権教育(ピアサポート)公開授業、メンターの支援を受けた若手教員による公開授業、区主任会研究授業も行うことで、様々な教科・領域等での研究を進めることができた。

**(2) 研修会・研究討議会の充実**

言語力を育てるためには、指導者が言葉や言語活動について意識し、理解を深めることが大切である。そこで、教員の指導力向上をめざし、若手教員を中心とした校内研修の充実を図った。講座制で教科・領域主任が示範授業をしたり、講話を行ったりした。若手は自分の気が付かなかった視点に、次回は授業展開に取り入れようと考え、実践もした。

研究討議会の活性化も図った。どの年齢層の参加者も活発に意見交換を行い、研究授業を行う指導者だけでなく一人一人が今後の授業に生かせることができるように、ワークショップ型研究討議会を取り入れた。マトリクス法・指導案拡大シート・概念化シートを活用し、成果・課題・助言を色ごとに記入した付箋をもとにグループで議論した後、話し合ったことを全体で交流した。グループで話し合うことにより多様な意見が出され、参加者の学びの場となった。このようなワークショップ型討議会を通して、一人一人が自分の意見を出して話し合うことができ、全体で発表することで成果や課題が明らかになり、それらを共有することができた。

さらに、研究討議会後に、一人一人が参観カードに研究授業や研究討議会で学んだことや今後活かすことなどを書くことで研修を重ねている。

**(3) 取り組みの交流**

一学期と二学期に本年度の研究についての取り組みを全教員で交流した。

一学期には、指導者一人一人が言語力育成について取り組んだ内容をまとめ、発表し合った。自分の取り組みをまとめることで取り組んだ内容を確認したり、今後取り組むことが明確になったりした。また、言語活動についての共通理解を図ったり、他の教員の取り組みを知ることで今後の取り組みの幅を広げたりすることができた。

二学期には、学年の取り組みとしてまとめて紹介し合ったので、本年度の研究について共通理解するとともに、成果や課題をふり返るよい機会となった。まとめの時期である三学期の実践に活かすことができる手法や教材研究も具体的に交流できた。その後、メンターと若手が交流し、メンターがより具体的な実践場面を想定してのシミュレーションを行うことで、特に若手にとっては児童の顔を思い浮かべての「明日の授業に活かせる」交流会となった。

## 2. メンターの感想



### (サギペディアの作成)

職員間のコミュニケーションを大切にし、日常的に機会を見つけ情報交換を行った。研究授業は、本校では各学年校内研究授業を行っている。校内の支援体制として研究部が中心となり指導案の検討等を行うが、学年の教員がメンターとなって支援することができている。この学年での支援は、研究授業時だけではない。例えば図工で初めて絵の具を使うときには事前に学年で話し合い、計画を立てて学年主任の授業を参観したり、日々の授業で、この展開の効果的な指導はと思う時にはすぐに授業を参観することができる雰囲気がある。また、研究授業時にOJTの指導員が来校され、指導助言を頂くのは、鷺洲小学校教員の全体の指導力アップにもつながっている。やはり、日常的なコミュニケーション、「△△の単位では、〇〇のところをどう教えている」というような声かけや、学年での支援体制の大切さを改めて感じた。

## 3. メンティの感想

◆ 4月当初は不安でいっぱいだったけれど、学年主任の先生や他の先生に色々なことを教えていただきながら、授業を進めることができた。子ども達や保護者とも交流を深め、学級をまとめていくことができ、周りの先生方に感謝している。4月からは、学んだ

### (私が生まれた時…)



ことを活かして、一人一人の発達段階に応じた支援ができるように、教材研究もしっかりと行っていきたい。

◆ 様々な学年、教科の授業を見せていただきとても参考になった。一人一人の良いところをみんなの前で指摘し、認め合える集団を育成することは、学級経営の基本だと感じた。今年度の経験を活かし、たくさん褒めて応援する言葉もたくさんかけることができ

### (浪速の伝統野菜)



ようになりたい。4月、自分がどんな学級にしたいのか明確に持って、一人一人が思いを表現できる学級づくりをしていきたい。

## 4. 成果と課題

### (1) 成果

- ・ 「教科指導」にしぼり、校内の研究主題「言語活動の充実」とリンクさせたため、研究討議を活性化させ、教員の参加学びの場とすることができた。
- ・ 日常的にまた事案毎に学年を中心に、話し合い、若手教員を支援する意識が根付いてきた。
- ・ 若手教員が、初発の授業展開での悩みを一人で抱え込むことなく相談できる雰囲気が醸成できたので、様々な事案についても一人で対応しなければならないという思いを軽減できた。
- ・ 校内のみならず、中学校区の幼・小・中と連携した若手育成の研修を行い、講師招聘や専門的な助言者を招聘することで、学校力の向上につながった。
- ・ 講座制の研修会を実施することで、知識技能を身につけた経験豊かな先輩の力を少しずつでも継承することができた。

### (2) 課題

- ・ 1～4年目の若手教員の増加  
対策 今年度の成果を踏まえさらに校内で育成する手だて（組織）について検討していく。
- ・ 1～4年目の若手教員の相互研修  
対策 異校種間連携や小小連携を活用した研修を教科連携等に深めていく。